

保育の場における保育者の育ちあいⅡ —遊び場面の実践記録検討を中心とした学び—

平野 仁 美
小島 千恵子
鈴木 裕子

I 緒言

本研究は、2007年度本学紀要¹⁾に掲載した「保育の場における保育者の育ちあい—遊び場面からの保育者の気づきと遊びを見る目の育ち—」の継続研究である。2008年3月、幼稚園教育要領・保育所保育指針²⁾が改定された。今回の改訂では、「職員の資質向上」は大きな課題であり、保育現場では改訂の趣旨に沿って、保育のあり方について新たな学びが始まっている。

本研究は、F 保育園の園内研修から、保育者が「子どもの遊び」を理解して子どもの援助ができるようにするために、遊び場面を取り出して検討している。子どもの気持ちや保育者の援助のあり方を学んだうえで、保育者の提供しあった遊び場面の「実践記録」の内容を繰り返し検討し、子どもを理解することを目的に研究を積み重ねていった。本研究では、継続的に行われている園内研修で得たさまざまな気づきや学びが、保育者それぞれに必要な力量を身につけ、園全体が組織として資質向上していくことを検証し、職員の資質向上の要素を探ることを目的とした。

(1) 実践を振り返ることの意義

保育は、子どもの発達に必要な経験が出来るように保育者が、乳幼児期の子どもにふさわしい保育内容を、子どもの視座にたつこと、環境を通して行われること、子どもにふさわしい生活となること、遊びによる総合的な経験となること、個々の発達の特性や個人差に応じて、保育することを考慮して展開されている。保育者は、事前に指導計画を立案して保育を進めていくが、保育の振り返りをし、自己の保育内容を点検することで、より保育効果が上がり、今後の保育を進めていく上で大切だと思われる。

その1つの方法が実践記録であると考ええる。

保育の経過や子どもと保育者の言語的な関わりから、保育の内容を振り返り、第三者を交えて、意見交換ができ、それぞれの立場からの気づきや考えを発見できる。また、今後の保育内容の展開の工夫や保育者の対応の方向付けが適確にできるという効果があると思われる。保育の振り返りは新保育所保育指針でも望まれている。

(2) 保育者が育つことの意義

保育者は、常に子どもの傍らにいて、子どもたちの「楽しい」とう感覚を育てながら、発達の相互関連性を意識し、保育している。子どもが、進んで身体を動かすことが楽しい、主体的な生活習慣を身につけること。人と関わるということが楽しいという感覚、自ら物事の法則性に疑問をもち考える力を養うこと。聞きたい、話したいという自発性、言いたいことが伝わる、もっと話したいという気持ちが出る。伝えたいという感覚、表現手段は様々だが、伝えたい相手に表現することが楽しいという感覚を養うことを5領域の理解として持ちながら、自発的に生活や遊びを体験していく保育が要求される。これらの視点を持って、保育実践ができるように保育者同士が互いに刺激し合って保育を展開し、互いの存在をプラスの連鎖の中で高めあい、育つ保育者が望まれている。

(3) 保育者の集団力の必要性

保育者の集団力という目の前の行事と一緒に乗り切るとか、日々楽しい仲間関係を保育者同士が築くとか言うことが浮かぶ。しかし、ここでは、園の子どもを園の保育者が常に気かけ、育ちの経過を保育者集団として支える。保育の計画の時点で、他の保育者からの助言を求め、子どもの発達の確認を、園中で行える保育者の質的集団力だと考える。クラスや担当に捉われず、保育者としての枠を広げ、互いの良い点を伝え合い、吸

取しながら、保育者の保育力を高められる集団がのぞまれる。このような保育者の集団力は、実践記録を書き、自己の保育を振り返り、実践記録の検討から、自己以外の様々な考えの枠組みと出会い、共に気づけた喜びに感動しながら、今後の保育へ戻す。その繰り返しの重ねる営みとしての保育と出会った時、保育集団の有能感が味わえ、個々の保育者の中に自己肯定感が育つのだと考える。そこに、保育の楽しさを知っている保育集団が生まれ、質の高い保育が展開されるのだと考える。

Ⅱ 研究方法

職員の資質向上につながる要素を探るために、F保育園で行われている園内研修について、園内研修の方法、研修内容、各保育者から提供された実践記録をもとに検討し考察する。

Ⅲ 研究の内容と考察

1. F 保育園の園内研修の概要

(1) 職員構成について

- (正規職員数) 11人 (産代・用務員も含む)
 - (非常勤職員数) 5人
 - (パート職員数) 7人 (調理員1名を含む)
- 以上、計23名

表1 園児数と保育者数 (クラス担当人数)

年齢	園児数	保育者担当人数
0歳児	6人	2人
1歳児	10人	2人
2歳児	18人	3人
3歳児①	18人	1人
3歳児②	17人	1人
4歳児	30人	1人
5歳児	29 (障2) 人	2人
パート職員	—	6人

※実践検討者はクラス担任を対象とする。
 ※園長・副園長はクラスを担当していない。

表2 保育者の年齢区分

20代の保育者	6人
30代の保育者	2人
40代の保育者	2人
50代の保育者	4人

※園長・副園長も含む

表3 グループの担当年齢の内容

グループ	20代	30代	40代	50代
0・1	3人			1人
2	2人		1人	
3	1人		1人	
4・5		2人		1人

※園長・副園長は50歳代

(2) 園内研修におけるグループ編成

【グループ編成の意図】

- ・ F保育園では、有意義に研修を進められる方法として、上記のように小グループを編成した。
- ・ 互いの保育実践の場面や実践記録がイメージしやすいという理由から、グループは4つに編成した。(表4参照)
- ・ 園長・副園長はどのグループにも属し、他のグループとの潤滑油の役割と研修内容に対する助言者の役割を担った。

表4 担当年齢区分 ※下記4グループを編成

<p style="text-align: center; border: 1px solid black; display: inline-block;">0・1歳児グループ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 0歳児担当2人 ・ 1歳児担当2人 ・ 園長 ・ 副園長 ・ 計6人 	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; display: inline-block;">2歳児グループ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 2歳児担当3人 ・ 園長 ・ 副園長 ・ 計5人
<p style="text-align: center; border: 1px solid black; display: inline-block;">3歳児グループ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 3歳児担当2人 ・ 園長 ・ 副園長 ・ 計4人 	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; display: inline-block;">4・5歳児グループ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 4歳児担当1人 ・ 5歳児担当1人 ・ 障害児担当1人 ・ 園長 ・ 副園長 ・ 計5人

(3) 園内研修の手順

- 1) 各保育者から出された実践記録について、該当グループで話し合いを持ち、話し合われた内容や検討の結果の気づきについて園全体に報告する。
- 2) グループ報告を聞いて、職員全体でさらに話し合い小グループでの話し合いからの職員の質向上の検証をする。

2. 実践記録の検討と考察

・実践記録をもとにした検討からの考察

各保育者が記録した実践記録をもとに、グループで検討された内容と考察を以下に紹介し、研修の場においての研究内容と考察を合わせて記載す

る。(表-5から表-7で以下に示す。)

(1) イメージの育ちの発見

1) 実践記録A(0歳児ふれあい遊び)

・0・1歳児グループ・(対象年齢)0歳児・(実践の時期)9月・(実践者)A保育者

表5 実践記録

実践記録Aの遊び展開	実践記録Aの考察
<ul style="list-style-type: none"> ・0歳児Hと「だいこんがとれた」「一本橋コチョココチョコ」などで子どもをくすぐって遊ぶ。…1) 	<ul style="list-style-type: none"> …1) 遊びイメージの投げかけがイメージが湧ききっかけとなっている。
<ul style="list-style-type: none"> ・0歳児YとNも歌や笑い声に誘われ、近寄って来たので、保育者が「YさんとNちゃんも一緒にやるか」と誘いHの横に並んで寝かせて順番にやっていた。みんなくすぐられたり、触られたりするのが好きで、 ・「もう1回」と繰り返し要求する。…1) 	<ul style="list-style-type: none"> …2) この遊びが始まると子どもたちが保育者の所に「楽しい」を求めて集まっていく。 親や保育者に、やってもらった時は楽しかったという思いがある時、楽しかったイメージが湧き、集まってくるのだと思われる。「だいこんが取れた」の遊びは、子どもの安心感・自分の思いを保育者がきちっと受け止めてくれる遊びであり、切られたり、くすぐられたり、食べられたりしながらほのほのした表現、自分の要求を通して、「面白い」を実現していく喜びが詰まっていた。そのためこの遊びから、面白い楽しいというイメージ付けが、心や頭にされ、蓄積されたのだと考える。
<p style="text-align: center;">↓</p> <p>それを見ていた1歳児たち</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・1歳児Y、R「いれて」「やって」と自ら寝て横に並ぶ。…2) 	
<p style="text-align: center;">↓</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1歳児M仲間に入らないが、やっている近くで見ている。…3) 	
<p style="text-align: center;">↓</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「Mちゃんもやろうか？」と誘ったが、恥ずかしそうに保育者の後ろへ行き、入ろうとはしなかった。その後もうじつと見ていた…4) 	<ul style="list-style-type: none"> …3) 遊びイメージは、その子なりの生まれ方がある。また、やりたい気持ちは、その子なりの表出の仕方があることに気づく。
<p style="text-align: center;">↓</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この遊びが終わり、それぞれ違う遊びに入る。 	<ul style="list-style-type: none"> …4) 遊びイメージは湧いているのだが、即遊びだしに結びつかない子もあることにMの姿から気づく。
<ul style="list-style-type: none"> ・この時、1歳児Mがぬいぐるみを持ってきて、1人部屋のすみでぬいぐるみに歌いながら、保育者がやったことをやっていた。…5) 	<ul style="list-style-type: none"> …5) 自分の遊びイメージをシュミレーションしている姿がここで表れている、1歳児Mの姿であり、自分以外のものや人に気づいていく発達の様子の映し出しと理解される。
<p>それに、1歳児Rも加わる。子ども同士の遊びが盛り上がる。…6)</p>	<ul style="list-style-type: none"> …6) 他児もMのとった行動を、逆に取り込み、遊びの1つの方法としての取り込みをしている場面は、集団生活の気づきの取り込みなのだと思える。他児のやったことを模倣して、遊びとして受け取っている。
<ul style="list-style-type: none"> ・このように遊びが広がり、保育者にやると求める子が増えてきた。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・この遊びが楽しかったようで、Mも少しずつ保育者に遊びを求めるようになる。…7) 	<ul style="list-style-type: none"> …7) Mは、人形を使つての疑似体験から、自分も体感したいという思いが湧き起こったのだと思われる。
<p style="text-align: center;">↓</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子ども同士でやり合う姿も見られるようになった。(ぬいぐるみから友だちへ) …8) 	<ul style="list-style-type: none"> …8) 人形でイメージの実現をしたことが、友達同士やり合う遊びへの発展につながり、体感できた。
<p style="text-align: center;"><2ヵ月後の姿></p> <p style="text-align: center;">↓</p>	<ul style="list-style-type: none"> …9) 見たイメージの発信を言葉へと結べた場面。「先生みたいに」とか「こうだったよね」とイメージが確認でき、実現して、言葉で発信している。
<ul style="list-style-type: none"> 1歳児Y「せんせーだいこんやって」 1歳児R「Rもやるー」 1歳児M「ここねんねするの。じゅんぼん」…9) 	<ul style="list-style-type: none"> …10) 0歳児と1歳児と一緒に生活する中で、1歳児の育ちを0歳児が学びとして取って、数ヶ月たつとマニュアルのように遊びを楽しむ姿が見られる。イメージが湧き、取り込み遊ぶ。(あの遊び⇒面白そう⇒「私もやりたい」の要求⇒遊んだ喜びを体感)
<ul style="list-style-type: none"> 0歳児も並んで一緒に寝転ぶ。…10) 	
<ul style="list-style-type: none"> ・保護者が歌を歌い出すと、やってもらうだけではなく、保育者側になり、くすぐったりするR…11) 	<ul style="list-style-type: none"> …11) 12) 13) 1歳児の遊ぶ姿を取り込んで、同じイメージを体感している0歳児の姿から、見たことを記憶し、遊びイメージとして、実現している姿から、遊びモデ
<ul style="list-style-type: none"> ・隣の子がくすぐられると自分までくすぐたくなり、笑いに誘われて体をよじらせるN…12) 	
<ul style="list-style-type: none"> ・ぬいぐるみを持ってきて、やってあげているR…13) 	

<p>ふれあい遊びをそれぞれの方法で自然な流れの中で楽しんでいる様子が部屋中で見られるようになった。…14)</p> <p>・隣の子がくすぐられると自分でくすぐったくなり、笑いに誘われる子どもの姿がそこかしこで見られるようになっていく。…15)</p>	<p>ルを取り込む為にも、面白そうだというイメージが湧くことが必要であると考える。</p> <p>…14) 子どもにとって、一番初めにやってくれて、「面白い」を味わわせてくれた先生にしてもらいたいと言う願望が出る。(遊びの元祖に遊んでもらうと楽しいのかな?)</p> <p>…15) こどもは一人ひとり感じ方もちがう。その子の特質を読み取り関わって、その子なりのイメージの湧き方を確認し、共感しながら、遊びを広めている。実践者Aの援助が素晴らしいと気づく。</p>
--	--

1) 実践記録Aから

<実践の概要>

0歳児担当の保育者Aは、ふれあい遊びを大切に考えている。乳児にとって、アタッチメントにより心地よさを味わい、安心して遊べる情緒の安定、自分に寄り添ってくれている保育者の存在からの養護的活動が、基礎となり、教育へ向かう心情・意欲・態度を培っていくのである。

この実践記録では、保育者と遊ぶ心地よさや、小さくても自己の生活のなかに仲間の存在を意識して、遊びを中心において、イメージが育つ。イメージが育ったことの発見から、提供する遊びを工夫する保育者の姿が現れる。そこから、乳児への遊びの提供の仕方を工夫する糸口の発見があるのだと感じている保育者の姿が伝わる。

言葉の発達がイメージの獲得に大きな影響をもたらし、目に見えないことを頭に描き、「楽しい」が味わえる0・1歳児の現状を捉えることができる実践記録である。

<保育者Aの実践への思い>

- ・保育者が口で言って遊びに誘うだけでなく、見ていて思わず顔がゆるむ、自然に体が動く、やりたと思うということを大切に保育したいと思い取り上げた。
- ・子ども同士でふくらむ遊びのおもしろさ、子ども同士刺激を受け与えて、楽しむ事の魅力を伝えたい。
- ・0歳児が一番好む、くいついてくる遊びなので「大根がとれた」他を取り上げた。
- ・赤ちゃん体操・マッサージを通して、子どもの表情は良くなり、どの子もケラケラ笑い、保育者との信頼関係が深まった。
- ・やっと思ひ⇒これから始まるよー楽しいことがと期待し⇒やってもらったら期待通り楽し

かったとケタケタ笑うようになった。(期待通りの満足感)

- ・1歳児も安心して、楽しそうに保育者に身をゆだねてくる。その横に私もやっと言わんばかりに寝転がり参加してくる0歳児。チョッと人見知りのMは、他児が喜ぶ姿を見てぬいぐるみとの関わりから始めている。安心を確認する様が、興味深かった。
 - ・保育者もこの遊びは、ただ面白いからやりなよと誘うのではなく、友だちが保育者にやっってもらっているのを見て、その子の体がやっもらっているわけでもないのによじれていく、感じていく、思わず笑顔になっていく姿を見ていい遊びだと思ったから大事な保育だと感じた。
 - ・保育者の気持ちがゆったりした時に遊んであげると、子どももその遊びをより楽しめる。
 - ・だいこんの遊びから発展して今度はどんな事をして欲しいと要求も出せるようになって来ている。
- ## 2) 0・1歳児グループの実践検討からの気づき
- ・楽しい遊びだとわかると、子どもから要求するようになる。遊び方がわかると、先生のかたわらで、子ども同士でもやるようになったことが、面白くてすごい光景だと思った。
 - ・子ども同士するのは長続きしないが、先生がそばにいて見守っていたり、一緒にやってくれたりすると楽しめることが確認できた。
 - ・絵本がブームになっている現状を活用した。絵本を見ながら自分の体を動かすのにはまっていた子どもたちの姿から、イメージ・模倣への保育がされた。発達の姿をきちんと受けとめ保育展開に結びつけたことが効果をあげた要素であると気づけた。
 - ・飛んだり跳ねたり体を動かすことが楽しい。絵

を楽しむのが絵本だと思っていたが、絵本の言葉から、動きをイメージして身体で表現するのを楽しむ。この現状の姿をイメージ育での遊びへとつなげたのがよかった。

- ・イメージは生活体験の中で育つことがよくわかった。
- ・個々との関わりを重視したことで先生の声が子ども一人ひとりの耳に届くようになってきた。
- ・先生の声が耳に届くようになると、0・1でも集団が出来ることが確認できた。
チビッコの集団はどういうことをきっかけにして出来るのか?⇒楽しいを共有することが条件。
楽しいことをしてもらった体験が積み重なって今の0・1の姿があるのだと子どもを見ていて保育者は確認できた。
- ・絵本を通して、とんで・跳ねてをして身体を動かしてから、「楽しい」がよりわかるようになったと実感している。
- ・先生との信頼関係ができたことで、「楽しい」ことがより楽しめるようになっていく。
楽しいことがわかるようになった。このことは、養護がきちんとされ、安心・安定の気持ちで育ったことが基本になっていることがわかった。
- ・楽しいことが心に残る。「こちょこちょ」と言葉を聞いただけで身体にビビビと感じる。身体で感じたことが、イメージできる知能の育ちだと確認できた。
- ・偶然でなく同じ本を何回も繰り返し持つてくる⇒この本を読んでもらおうと、何が楽しいかを知っている⇒イメージの育ちこれがやがて「つもりの世界」につながるのではないかと考える。
- ・小さい時から丁寧に関わることの大切さや、安心・安定の中で遊ぶ事が育ちの土台をしっかりと気づける要素の一つだとこの実践から気づけた。

3) イメージの育ちの発見の考察

「子どもは幼ければ幼いほど、おとなと一緒にあそんで、興味や関心を共有したがる。」と神田ⁱⁱⁱ⁾は講演会や著書の中で述べている。また、「ボクたちが楽しいと思っていることは、保育者もきっと楽しいと思っていると子どもは乳幼児の期間全

てを通して共通している」とも述べている。ここから神田は、「園生活や子どもと保育者の信頼関係は遊びから始まる。子どもの育ちの仲間作りも遊びからはじまる。保育者のめざすことも、遊びの充実である。」と述べている。F 保育園の保育者たちも、神田が述べるとおり遊びを中心に一日を考え、生活している。遊びを提供し、関わっている中で、保育者 A は子どものイメージの育ちを発見した。イメージが育つことで、自分がくすぐられていないのに、くすぐりたいと感じる。

また、友だちが保育者にやってもらっているのを見て、その子の身体がやってもらっているわけでもないのによじれていく、感じていく、思わず笑顔になっていく姿があると述べている。

このような子どもの状態は、イメージが育っているからこそ現れる姿だと考える。

イメージがわき、頭でこうなると予測する状況の表れだと思われる。表象能力=イメージは言葉の獲得と大きな関わりをもっているのだと考える。

1歳半過ぎる頃から、言葉を獲得しだした、乳児の脳裏に、目の前にないものが想像できるようになる。例えば、散歩で出会った「いぬ」を、園に戻って来てから演じている姿やテレビや絵本に出てきたものを思い出して、もう一回見たいと要求したり、その時、流れた音楽を口ずさんだりしながら、またこれがやりたい、見たいと要求している時には、乳児の頭の中にはイメージが湧いていて、それがもう一度体験したい、見たい、身体を使って表したいと考えることができるようになる。と考える。

保育者 A は、子どもとの生活を通してイメージがわく状況を発見しているのである。見たり、聞いたり、体験したときに「楽しい」という感覚が体感でき、要求することでまたあの「楽しい」を味わえると思うからこそ、それを分かってくれる人に伝えたい、その伝える手段は、言葉であったり、しぐさであったり、さまざまである。

しかし、確実にイメージが湧き、「ああしたい」、「こうしたい」、「あの時楽しかったなあ・・・」、「あの楽しいが味わえたのは、あの遊びだ」、「あそこに行けばやれる」、等と脳裏に思い要求し、実

現したとき、「やっぱり楽しかった」という思いを味わう。こういう繰り返し、豊かなイメージ作りへと発展し、み立てたり、つもりになって遊ぶ楽しさを味わっていくのであると考える。その、み立て・つमりの遊びが乳児期の遊び世界を広げていくのである。乳児のイメージの発達は、それを受け止める、大人との関係が、園という空間では、「遊び」でつながっている。遊びながらの体験は、子どもが獲得するさまざまなイメージの育ちを支えているのだと考える。

保育者は、育ちに結びつく遊びの提供を常に考慮したいものである。乳児であっても、保育所という集団の効果を生かしながら、個々への丁寧な関わりを土台にした遊びからはじめ、子どもと保育者のイメージの共有からがその育ちのスターとであるのだと考える。

(2) 内面の育ちの発見

1) 実践記録 B (2歳児アンパンマンごっこ)

・ 2歳児グループ・(対象年齢) 2歳児・(実践の時期) 11月8日・(実践者) B保育者

表 6 実践記録 B

実践記録 B の遊び展開	実践記録 B の考察
<p>・ 戸外でアンパンマンとバイキンマンの追いかっこをして楽しめるように、アンパンマンやしよくばんまん、バイキンマンのお面やマントを用意しておいた。</p> <p>・ 毎日お面をかぶってままごとをしたり、三輪車に乗ったりして遊んでいる。…1)</p> <p>・ 今日、しよくばんまんのお面をかぶった R 男に「先生、バイキンマンになって！」と言われたことがきっかけとなり保育者 B と子どもたちの追いかっこごっこが始まった。</p> <p>・ 保育者がバイキンマンになると、周りで遊んでいたアンパンマン(アンパンマンのお面をつけた子ども)が「キャー！バイキンマンが来たー！！」と言って逃げ出して追いかっこごっこがさらに盛り上がっていった。…2)</p> <p>・ バイキンマンが「食べちゃうぞー」と追いかけていくとバイキンマンのお面をかぶった、M 子も保育者の姿を見て両手をあげて一緒に追いかけて始めた。…3)</p> <p>・ バイキンマンが近づいてくると、「アンパンチ！」「しよくパンチ！」と言ってバイキンマンにパンチをしてくる子や遠くの方まで逃げて「アンパンマンこっちだよ！」と叫び、バイキンマンが自分のところへ来ないと、自分からバイキンマンの近くに来てバイキンマンが追いかけてくるのを待っている子もいた。…4)</p> <p>・ R 男は、砂場でままごとをしていたジャムおじさん(他の保育者)に声をかけたことで、ジャムおじさんも一緒に追いかっこごっこに参加した。…5)</p> <p>・ R 男はジャムおじさんを守ろうと、両手を広げてバイキンマンに「しよくパンチ！」とパンチをしたり、他の子も捕まらないように手をつないで走って逃げたりして楽しんでいった。…6)</p> <p>・ 少し経って疲れると、砂場に行ってジャムおじさんにご飯を作ってもらったり、休息をしたりして、バイキンマンが近づいてくると「バイキンマンが来たー！キャー！」と言って逃げ回り、繰り返し遊んでいた。…7)</p> <p>・ バイキンマンに見つからないように R 男とジャムおじさんが物陰に隠れたことにより、追いかっこごっこからまた次の遊びへと入っていった。…8)</p>	<p>…1) お面が用意された事で、かぶったお面のキャラクターに変身する事が容易になっている。</p> <p>また、お面を取り替えることで、自分の遊びを切り替えるということも自在に行っている。</p> <p>お面という環境の活用がその気になりやすい雰囲気を作って遊びを盛り上げている。</p> <p>さらに、自分で選び、自分で切り替え時間経過にともない遊びを変化しながら、関わる仲間も、場所も変えながら、自己の思いを達成しつつ遊んでいることがわかる。</p> <p>こういう日常の遊び経験が、一人ひとりの子どもの気持ちを満足させ、自分のやりたいことを見つけて遊ぶ気持ちの育ちを保障しているのだと考える。</p> <p>…2) 保育者に自分の思いを気楽に伝える、伝えられたことを保育者が受けて、遊びの盛り上げをした。子どもは、自己の要求が受け止められたことにより、自己を肯定された心地よさが自然に遊びを楽しませているのだと思われる。</p> <p>…3) 保育者の遊びモデルを取り込むことで、遊び方がわかり、最初は模倣動作であったとしても繰り返し遊ぶことで追いかっこ方が自分のものになっていくのである。</p> <p>「ああすればいいんだ」「こうすればいいんだ」と見よう見まねでやったことが成功すると、子どもは思ったことを実行する心地よさが味わえる。思ったことの実現という味わいが、達成感となり、動けた自分、楽しめた自分に出会えるのだと考える。</p> <p>…4) 相手を挑発したり、引きつけたりする遊びの面白さは、自己内対話から生まれるのだと考える。</p> <p>…5) 別の場所で遊んでいる人に声かけて誘い、保育者が子どもの気持ちや何が育てたいかが話し合われていると、他の保育者の協力も得られ、遊びが盛り上がった、変化したりすることができる。</p> <p>…6) 自然に共通理解が促され、遊びが進む状況が生まれると、遊びながら、「ジャムおじさんを守ろう」という気持ちが湧く。自分が誘った遊びの中で、遊びの共有がされたことで、R 男の内面の育ちの確認を保育者 B は</p>

- している。
- …7) 2つの遊び場面を行きつ戻りつできるのも、内面で遊び場面の共有ができていからなのだと考える。
- …8) 保育者と子どもの遊びの共有が同じ遊びを楽しめているという共感につながり、この気持ちをさらに、次の遊び場面に自然につなげていけるための保育者のかかわりが大切だと考える。
- 子どもの思いをわかり、心地よさの中で思考が保障され、考えたことが実現していくことで内面の育ちがさらに高まるのだと思われる。

1) 実践の記録から

<実践の概要>

この実践記録は、2歳児がアンパンマンごっこを生活の中に入れ込み何をするにもアンパンマン関連の生活をして暮らしたことで、現実と虚構の世界をゆきつもどりつしながら、自己の思いを実現していきやすい形を提供した保育である。気持ちのモヤモヤを解決したり、新たな発見をしたり、ちょっと大きな壁を乗り越えたりしながら、子ども・保育者・保育内容の関わりをアンパンマンごっこの世界で満たしながら進めている。それぞれの遊びイメージは、バラバラでもアンパンマンのキャラクターでつながり、「つもり」を友だちと共有して「みたて・つもり」遊びが盛んに行われ、2歳児なりの鬼ごっこ「追いかっこ」を楽しんでいる様子が記録されている。

なんとなく友だちの存在に気づき、そこで一緒にいることが楽しくて、ストレスのたまらない空間の広がりの中で、2歳児が満足して遊んでいる様子が記録されている。

<保育者Bの実践への思い>

- ・普段からアンパンマンになって遊ぶことを楽しんでいる子が多く、戸外遊びの中でもアンパンマンになって遊べるようにと、お面を用意した。
- ・保育者がバイキンマンになって追いかけることにより、追いかっこごっこが始まっていった。同じことを何度も繰り返していたので、すぐに飽きてしまうかと思ったけれど、バイキンマンを見つけると、「アンパンチ！」とやったり、逃げたりと、とても楽しんでいる姿が見られた。
- ・バイキンマンよりもアンパンマンのほうがやり

たい子が多いかなと予想していたが、バイキンマンになり追いかけるのを楽しんでいる子も多くいた。周りで遊んでいた年上の子たちも入ってきたりして一緒に楽しめたのがよかった。

2) 2歳児グループの実践からの気づき

- ・保育者の連携がよく、保育の展開の為の話し合いがとてもよくされている。
- ・アンパンマンになって出かけていっているんなことをその子成りに取り込んで来れる工夫がされている。(子どもは楽しい)
- ・散歩一つをとっても散歩と言わず、「アンパンマンたちパトロールに行くよ」などの声かけがされ、こどもは、アンパンマンを片付けずにそのまま散歩に行ける工夫がなされている。パトロールと言う声かけで出掛けた散歩は、周りをよく見てくると言う使命が2歳児の中に湧き、よく取り込んで来れる。
- ・保育者が声掛けした言葉が、子どものイメージと結びつき、行った先のそこでどんな楽しいことが待っているからがわかって行動する。言葉とイメージが結びついて楽しいことへのワクワク感を頭や心に抱かせるという作業を子どもが自らすることができている。
- ・言葉の発達=イメージ=行った先で何が起こるか?ある程度の予測が取れるようになる=楽しいを友だちと共有するようになる。
- ・2歳でも自分が感動した時には、自らの身体で表現する。その時の添ってしてくれた先生の受け止めが、子どものイメージとずれない事が大切である。
- ・子どもが取り込む力が育つように、先生たちが言葉かけしたり、気持ちを添わせてあげたりしていることが、子どもたちを見ているとよく分

る。遊びを、一緒に楽しんであげる保育者の姿勢で、子どもの内面の豊かさが育つのだと考える。

3) 内面の育ちの発見の考察

「2歳児という年齢に限定すれば、友だちの行動の意味を理解できるのは、自分もやったことのある行動を友だちがしているのを見た時、あるいは、友だちのしているのと同じことを自分もやれると思った時だと考えられます。」と神田^㉞は言っている。まさに、この保育の実践者B保育者は、アンパンマンごっこの中で、神田の言ったことを実現している。見て確認、見て取り込む、一緒に楽しいと仲間の居るところで遊ぶ。この繰り返しの中で、言葉が自分と友だちのはしわたしをしてくれることにも気づく。

最初は、「自分だけを見ていて欲しい」だけだった2歳児が、違う場所から「せんせ〜っ、こっちに来て〜」「せんせ〜っ、これ見て〜」と呼んでいる友だちの姿を見たとき、行動の意味が理解できたり、自己の中で「あの子が、終わるまで待とう」という状況が湧き出てきたりすることがあるのだと感じる。あきらかに、子どもの数より先生の数の方が少ないことにも気づいて、2歳児なりに「待つ」という気持ちが育つのだと考える。

待ちながら子どもは、友だちのさまざまな姿に気づく、その時その子の内面世界が育っているのだと考える。

「あの子、今、あれをやるようとしているんだ」「あれかあ、楽しいことって…」「あれが、言いたかったのか…」「そっか…」と分かるようになると、がまんできるようになるのだと考える。がまんは、自己の思いを内面処理できないとありえない心の動きなのである。

保育者集団は、この点を十分考慮して保育にあたっている。そのための連携の仕方や保育の流れがよく話し合われている。子どもの内面の育ちを促す効果のあがる保育展開の工夫がされている。子どもの内面の育ちが確認できたとき、保育者も保育をすることや、子どものそばに居ることに対して、喜びを感じるのである。実践中のこの喜びの感覚を、実践記録に残すことにより、さらにこの保育のどこが子どもに良かったのかを確認できるのである。そのうえ、一緒にその実感を確認してくれていた仲間の保育者の存在は、保育を自己満足に終わらせない、良い刺激を提供してくれるのである。保育者の連携は、保育の向上には欠かせない要素の一つであり子どもの内面の育ちを支える保育につながるのだと考える。

(3) 友達関係の育ちの発見

1) 実践記録C (ごっこ遊び)

- ・ 3歳児グループ (対象年齢) 3歳児 (実践の時期) 10月中下～11月上旬
- (実践者) 3歳児担当C保育者

表7 実践記録C

実践記録Cの遊び展開	実践記録Cの考察
<p>・ 青と赤のホールで弁当屋さんごっこをしている時のこと。 ・ 女児H、Mが弁当にごちそうを詰めていた。 保「うわあ！おいしそう。なにが入っているの？」 「ちょうだい」というと H「いいよー！」「こっちに座って」とテーブルを指さして座ってと言う動きをした。 それを見ていたMも…1) M「はい、どうぞ」と自分の作った弁当を出す。…2) 保「ばくばく」「MちゃんとHちゃんの作ってくれた弁当おいしい！」「おかわり！」と言うと、また作って持ってきてくれた。…3) それを見ていた女児M①、S、R、M②、男児K、もそれぞれ弁当を作って持ってきてくれた。「先生食べて」「先生こっちのほうがいいと思うよ」「これどうぞ」「私の食べて」…4)</p>	<p>…1) 友だちと保育者のやり取りをみてMが「あすすればいいんだ」と取り込んで、いる姿である。 …2) すかさずMも自分の作った弁当を出した瞬間であった。 …3) MとHは保育者に受け入れられ、認められたことで、互いは友だちという心地よい感覚が湧いたのである。おかわりを要求する保育者の声かけに嬉しいという感覚が湧きそれが張り切って遊ぶことへつながったのである。2人は仲良し、2人は友だちという気分になったのだと考える。 …4) 友だちという感覚の中で楽しそうに保育者と関わっている様子を感じ取り、5人の子が、保育者に弁当を作って運んでいる。このことから、MとHと保育者の弁当屋の遊びが、他児への刺激となり、同じ事をする子が出たのである。</p>

そしてしばらく弁当を作っては保育者に運んでくるとい
う遊びが続いたが、その後、片付けて戸外遊びをしに
行った。

戸外へ行くとジャングルジムの所で、男児R、M、Y①、
M、Y②、Y③、Rが集まってなにやら真剣に遊んでる。
保育者は子どもたちがどんな遊びをしているのか黙って
側に行ってみようと思いつきながら歩いてきた。

数人の子が保育者の存在に気づき、「今、パーティーやっ
とるよ」と言って教えてくれた。…5)

- ・テーブルの上には、食器に砂の入ったごちそうが並べて
あった。それなりの工夫がされていて、テーブルの上に
ご馳走がたくさん並べられていた。

保「すごくたくさんあるね！これ誰が食べるの？」

R「先生が食べてよ！」

保「こんなにいっぱい先生が一人で食べていいの？」

M「みんなで食べようと思っていっぱい作っとるだよ」

R①「次は何が食べたい？」

R②「あと、デザートが欲しいね」

Y「デザートはおいしいでみんなが喜ぶ」と言ってどんどん
ご馳走入りの食器を運んでくる。…6)

- ・一方チビッコハウスでは、女兒A①、M①、k、M②、A
②、M③、R、H、M④がそれぞれ食器に砂や葉っぱを入
れて、何かごちそうを作っていた。

保「今からRくんたちが作ってくれたごちそうを食べる
よー！」「みんなも食べる？」…7)

A①「今、バーベQやっただけ」と言って大きい丸い石
の上に葉っぱをのせて焼いていた。

それを見たR①、M、R②も葉っぱを持ってきて焼きは
じめた。他の女兒は、食器に砂を入れてごちそうを作っ
ている。…8)

R「ケーキできたよー！」と言って網目になった食器いっ
ぱいに砂をいれて持ってきてくれた。

そして、テーブルにたくさんのごちそうが並ぶとみんな
で「いただきます」をして食べた。…9)

しばらく遊びが続いた。

片付けの時間になったので呼びかけて、片付けを促して
いると、

Y「まだやりたい！」と言った。

保「じゃあ、また、明日弁当ごっこ所で弁当作れるし、
今日みたいにパーティーやればいいじゃん」と言うと

Y「うん、友だち誘って先生にいっぱいごちそう作ってあげ
るね！」と言って

嬉しそうにしながら食器の片付けの続きを気分よく進め
た。…10)

保育者の喜ぶ様を刺激として、気づいた遊びだとい
える。

- …5) 戸外に保育者が出て行くと、気の合う子たちがパー
ティーをしていた。

2階で弁当屋をやっていた子たちとは違う集団で
あったが、保育者Cは同じような遊びがされていたの
に気づいたのである。

しかし、2階の弁当屋の時は、保育者の言葉かけが
きっかけとなり、他児が遊びに加わってきた。戸外で
は、子どもたちの遊びの中に後から出て行った保育者
Cが加わる状況であった。

この2つの場面から、友だち関係を目を留めたので
ある。他児の遊びを取り込む姿である。

- …6) それぞれの子がパーティーをするために、自分の考え
を仲間に伝え、その料理を作っては並べていた。

料理作りの中で、仲間の考えを尊重しながら、また
は取り込みながらあそびが進められていた。その様子
から、互いの思いを発信していくことで、仲間同士が
育つ要素を発見ができた。友だちの言葉に耳を傾け、
アイデアを取り込んで実現して行こうとする態度
が、友だちの存在を子どもなりに認めていることなの
だと気づけた。

- …7) ちびっ子ハウスで遊ぶグループは、バーベQ屋をやっ
ていた。この遊びは、本児たちが3歳児クラスだった
ときに現在の年長組がよくやっていた遊びである。

自分たちにとっては、先輩の遊びを取り込み、1年
後に実現している。年長組への憧れを溜め込んできた
結果をここで実現しているのだと考える。何人かの子
が遊びの共有をし、年長の遊びへの共感を温めあつ
ていた結果、誰が始めようと誘ったのか分からないが、
友達関係の中でのアイデアの提供であったと予測す
る。

- …8) バーベQを焼く様子がなんとも楽しげで有り、会話が弾
んで、仲間と遊ぶのが楽しいと感じる要素だったと思
われる。

- …9) こちらのグループも料理を作って食べて満足そうだっ
た。仲間同士のアイデアを取り込みながら遊びを楽
しんでいる。テーブル狭しと並べられたご馳走から楽
しかった遊びを友だちと味わえたことが推察できた。

- …10) ジャングルジムのグループもちびっ子ハウスのグルー
プも、仲間の存在に気づき、仲間と会話しながら考え
たり、工夫したりして遊べた有能感がうかがえる。今
日の遊びが明日の楽しい仲間との遊びを楽しむにでき
ることにつながっていることが感じ取れた。

黙々と取り組み、アイデアを出し合い、そこに工
夫が生まれ、友達と一緒に遊べた喜びが味わえている
のだと思われる。

1) 実践記録から

<実践の概要>

この子たちの部屋は、2階にあった。3歳児は2クラスあり、隣のクラスの前に少し広いホールがある。

そこに、いつでもホカホカ弁当屋ができるコーナーが設定されていた。しかし、男児はあまりその弁当屋のコーナーで遊ばなかった。もっぱら、戸外に出て行って、キッズの森の中にあるジャングルジムを中心としたところで、気の合う子とバーベQ屋をやったり、ご馳走をテーブルいっばいに並べたりして、パーティーを楽しんでいる。3歳児なので、それぞれがなんとなく固まりの中には居るが、友だちの遊びを刺激として、自分も真似たり、それなりの工夫を加えて、同じような遊びを並行的に行っている場面だが、保育者の存在によって、一人ひとりの遊びが繋がっていくのである。

遊んでいる姿は、見たことがないのに、時間が来て戸外の遊びを終結させる方法として、保育者がホールの弁当屋を引き合いに出してみると、すんなり片付けて、それをきっかけに、ホカホカ弁当屋で遊べるようになった。子どものイメージの中には、2階のホールの設定も組み込まれていたのである。

イメージの中には、一緒に遊ぶ保育者と友だちの姿もはいていたようだ。

<保育者Cの実践への思い>

- ・青赤のホールでは弁当屋ごっこをしなかった男児たちも戸外でバーベQやパーティーごっこをしたことによってホールでの弁当屋ごっこをやりはじめることができた。
- ・ホールでは、女児のほうがよく遊べていて、男児はなかなか遊べなかった。戸外の弁当屋ごっこやバーベQごっこは男児もよく遊べていたので室内の方でも同じように遊べるようになったらよいと思う。夏に行ったアイス屋の時は、ほとんどの子が盛り上がっていたので弁当屋ごっこも同じように楽しめたら良い。
- ・戸外で遊んでいた時は、どの子も表情がよく、子どもの様子を楽しんで見守ることができた。
- ・遊びが続くように保育者が「何か言わなくては」という思いがあり、声掛けを多くしてしまっ

た。

子ども達だけで何ができていくかを見守ることもしてみようと思う。

<実践者の補足説明>

- ・室内のホールでは、男児は弁当屋ごっこでは、ほとんど遊べないのに、戸外に行くとすごく楽しく遊べる。夏にやったアイス屋・ポテト屋は男児も女児もすごく楽しめていたのに、お弁当屋はどうしてやらないのだろうか？
 - ・最近では外で遊びが楽しめるようになったからか、少しずつ遊べるようになってきている。
 - ・R君の表情も良くなり、可愛いと思える。
- ## 2) 3歳児グループの実践からの気づき
- ・3歳児の遊びが育って見立て・つもりを気の合う友だちととても楽しんでいる事が実践記録から良く伝わる。
 - ・先生や友だちのことを家に戻ったとき話したり、誰とどんな遊びをして遊んできたか楽しいかを親に伝えると、親は嬉しく思ったり、安心したりする。
 - ・困った子を手助けしてあげている姿がこの頃よく見られる。この態度がどこで育ったかと言うと、あのキッズの森で楽しく展開されているごっこ遊びの中から育ってきている事を確認する。
 - ・子どもが育ってきた様がよく実践記録の中に出ている。
 - ・子どもの思いをひたすら受け止める先生の対応に、子どもたちが気楽に自分をさらけだして遊べている。そこから日常の安定が育つ事を確認できた。
 - ・保育者が提示した遊びをきっかけに、自分達の楽しめる遊びを工夫していく子どもの姿がある。
 - ・友だちと考えたり、工夫したりして遊びを生み出している。
 - ・3歳でも友達関係がしっかり育ってきている。友だちと遊ぶと楽しいんだという思いをよく味わえている。
 - ・ごっこの遊びの中で、簡単な役割分担も子ども同士で行えている。
 - ・自分の生活体験をごっこの中に持ち込んで、遊んでいる子どもたちを先生が良く見れている。

子ども同士の関わり・保育者との関わりを楽しいとわかり、自我を抑えていく力もこういう遊びの繰り返しのなかから育つのだと思われる。

3) 友だち関係の育ちの発見の考察

3歳児は、時間的、空間的なつながりが理解されるようになる時期である。

実践記録の中でも現れているように、目の前に居なくても、友だちが遊んでいる姿が想像できるようになって来て、「あそこに行って、これをしよう。」「あそこに行けば、〇〇ちゃんがいる。」「あそこには、これがある。」という感覚が段々育ち、子ども同士の生活が徐々に、充実してくる時期である。

このとき、保育はどのような要素から成り立っているかということを考えてみると、先生、友だち、遊びの内容の3つからなっている。これらの要素は一つ一つが独立しているのではなく、相互に関連して保育を組み立てているのである。また、3歳児なりに保育には流れがある。ある活動、遊びが関連し合っただけの遊びをイメージし、また新たな遊びを生み出していくということが、少しずつできるようになって来るのであると考える。

保育者の言葉かけがその子もしくは、近辺で遊んでいる子への刺激となり、遊びの工夫を生み出す。3歳はまだ遊びの展開の中身は未熟だけれど、それなりに変化が現れるのである。

また、友だちの存在にも気づき、意識して自分の遊びへと展開していくのである。友だちとの関わりが刺激となり、それに反応したり、友だちのしていることを取り込んだりする姿からそれが見られる。

子ども同士の生活が充実してくるから、友だちと同じ場にいるのが楽しく、ごっこ遊びもできるようになる。

遊びながらよく話もするようになり、友だちとの会話もそれなりに楽しめるものである。実践記録を書くと、保育者の思う流れのなかで、保育者は、意図や願いを持って保育を展開していることに気づく。

3歳児の担任は、この時期友だち関係が、段々育って欲しいと願っている。

自己主張が先にたつ3歳児が、トラブルに直面せず、保育の流れの中で遊ぶことが容易でないこと

を、実践記録を書いた保育者Cは理解している。

保育者Cは、日頃から丁寧に子どもに接しているし、保育者の思いを胸に秘めながら、「待つ・見守る」を続ける保育をしている。自分の保育のもつ意図を、言葉やげや子どもに添うという行動の中で、示している。

その保育者に見守られながら、子どもたちは安心・安定を得て、遊び続けた結果、自分の周りの友だちの存在に気づき、一緒に場を共有して遊ぶ。

言葉や行動のコミュニケーションが楽しいと感じだしてのびのびと遊んでいる。

まさに、集団生活の体験の中から得られた、友だちと一緒にいることが楽しいを知った時期である。家庭では味わえない、園生活の中で得られた結果だと考える。

そこで仲間と満足して遊び、仲間に影響を受け、自分らしさを築いていく。この体験の中から、友だち関係の育ちが生まれるのだと実践記録検討から、保育者たちが理解でき、確信を得たことが貴重だったと考える。

3、園内研修で実践記録を検討することの意義

(1) 実践から振り返ることについて

保育は、日々流れるように進み、さまざまな保育が子どもたちに向け展開されている。保育者は、保育指導計画案の立案をして保育に望んでいるが、そこでどんな保育が展開されたか、子どもと保育者のやりとりの中身から何が発見できたのかを実践を振り返ることから探ると気づけなかったことに気づけることが分かることがある。

また、実践者のみでなく他の保育者のまなざしを通して見ると、さらにその保育のもっと奥深い発見ができることがある。園内研修の場で共にその発見や気づきに出会うと、保育をしたことの有能感がさらに高まるのだと考える。

<実践記録検討から得られた保育者の気づき>

1) イメージの育ちの発見から

乳児保育は、複数の保育者が常に同じフロアにいて、一緒に保育を展開している。ここでは、保育者Aの実践記録が出された時点で、この保育者の保育を共有していた保育者が3人いた。実践記録検討において、保育を実際に見て、子どもと

保育者の会話を聞き、関わり方の筋道の一部始終を観察していたことにより、保育者Aと共に子どものイメージが育つ過程を、保育を展開している保育者より、客観的に観察していたという点が複数担任の効果として現れている。実践記録の検討を通して、保育者Aは、自分を支えてくれている仲間存在と支援に気づけた。このことは、実践を検討していく中で、保育者Aがイメージの育ちを発見したときと同じ時間・空間の中で仲間も同じ発見ができていくことに気づけたとき、得られた気づきであると考えられる。

2) 内面の育ちの発見

この実践記録場面は、2歳児の保育内容である。ここでも保育者は、複数担任で保育を日々展開している。この実践記録からは、保育者同士の日頃の連携成果が同じ場所で遊んでいない子どもの育ちに現れたことを発見したことで、保育者同士は、子どもの内面が育った結果だと考えた。遊びと遊びのつながりを、子どもが遊びの中から獲得し、自分なりの遊びの生み出し方が味わえている場面である。保育者同士は、自分の担当しているコーナーから、それを確認し、実践記録の検討の中で自己の意見を伝え、他の保育者から共感を得ていることで、保育への意欲が高まっている。保育者Bは、保育者として1年目であり、他の2人の保育者からの影響を多大に受けながら、保育の手応えを、実践記録の検討場面で体感している。先輩保育者の保育姿勢が、保育者Bに伝わり、3人の連携が保育へのプラスの連鎖を生み出していることを実践記録検討から味わえている。自己が気づけなかったことを同じフロアに居る別の保育者から伝えられることで、自己の学びや気づきに帰ることができる。このことは、複数担任制の利点であると考えられる。

3) 友だち関係の育ちの発見から

この実践記録は3歳児の保育を検証したものである。3歳児の保育は、クラス担任制をとっている。実践記録検討をするうえで、担任保育者Cより、説明を受け記録の読み取りをしている。自主活動場面という事で、担任以外の保育者の目に遊んでいる子どもの姿は入ってくるが、乳児の複数担任制ほどの意識を持って、他のクラスの子どもを見ている余裕はないと検討の状況から感じ取れ

た。担任の説明内容の把握の中に、記録から理解していると見られる発言が伺われる。遊び状況の中身や保育者の思いをきちんと振り返りながら伝えている点は、実践記録を書くことで、担任がそのときの状況を、確認しながら、自己の対応の確認をしている。他の保育者に伝えるという行為を通して、もう一度自己の保育を見直す体験をしている。そこで保育者Cが自分で気づけたことと、実践記録検討に参加した他の保育者との話し合いの中から、保育者Cが気づけたことがあると考える。保育中の感じ取りは、実践記録検討からの気づきと比較すると、「なんとなくこんなようだ」「友だちと楽しそうだった」と感覚的受け止めが主であり、検討からの話し合いからの学びでは、保育実践に対する参加者の疑問への応答の中で、整理されたり、新たな発見をしたりすることがあると再確認できた。話し合いを通して、自己の保育への気づきが多くなることや自己以外の保育者の気づきや提言を取り込むことは、今後の保育実践への楽しみが増し、保育意欲へとつながるのだと考える。

(2) 子ども理解を深めることについて

1) 園内研修からみえる保育者の資質向上の要素

保育園の現場では保育時間が長くなり、職員雇用の面においても、正規職員のしめる割合は全体数からの割合が、非正規職員の数のほうが多くなり、責任ある仕事分担を少ない人数で補い合いながら保育を進めているのが現状である。

保育内容の充実を要求されるが、非正規職員の意識が、なかなか高まらないのが保育現場の悩みとなっている。しかし、非正規職員の中にもクラス担任という重責を担っている職員も多く、保育の内容を十分理解し、各園の保育課程を踏まえた保育を展開していくことが今後も要求される。

大勢の職員を抱える保育現場では、全員が揃って、話し合う場面作りが非常に困難である。

F保育園の取り組みは、このような状況を考えての小グループ編成の成果を園全体の学びへと発信・転換していく1つの方法である。

話し合いに慣れない非正規職員も小グループの話し合いの場では、時間経過と共に自己の思いを言葉にすることが出来る様になって行けた。

ここでのメリットは、職員同士が互いの保育感

をさらけ出し、論じ合うことが子ども理解へとつながり、子どもを大切にする保育の展開の追及ができることである。また、保育集団力を高め保育を考える力を身につけられると考える。

2) 今後の課題

研修を進めるうえでの今後の課題は、一つに時間調整・時間捻出など、雇用との関係性のうえにたった研修時間の作り方である。次に、現場密着型の研究課題の設定と、保育を実践しながら研究できる内容の工夫である。さらに、効率的な研究の進め方の工夫を、保育者自身が考案していく意欲が高まる、刺激と肯定される職場環境であるとして、職員同士の学びに対する有能感の高め方の工夫により、保育集団力を高め互いを尊重し合える保育力の養成であると考ええる。

Ⅳ おわりに

園内研修は保育者の資質向上にとってとても有効であるが、園内研修を継続していくためには、職員が、園内研修の必要性を感じ、自身が職員間で協力して園内研修を行っていかうとする意識改革が必要である。意識改革を行うためには、何よりも保育者が「楽しい」と感じて保育することができる職場環境を作ることである。保育者の保育に対するポジティブな感覚が子ども理解を深め、保育内容の充実が図れ、自身の資質向上について前向きに考えて取り組めることにつながっていくことだと考える。

【引用文献】

- i) 2007名古屋柳城短期大学研究紀要
- ii) 2008年3月告示幼稚園教育要領・保育所保育指針
- iii) 神田英雄：(2007) 保育に悩んだときに読む本：ひとなる書房

【参考文献】

- ・飯田和也：(2005) 一人ひとりを認める保育：北大路書房
- ・今井和子：(2002) 自我の育ちと探索活動：ひとなる書房
- ・植原邦子著：(2006) やさしく学べる保育実践ポートフォリオ：ミネルヴァ書房
- ・大場幸夫：(2007) 子どもの傍らに在ることの意味：萌文書林
- ・小川博久：(2001) 遊びの探求.：生活ジャーナル
- ・加藤繁美：(1999) しあわせのものさし：ひとなる書房
- ・加藤繁美：(2002) 子どもと歩けばおもしろい：小学館
- ・加藤繁美：(2005) 5歳児の協同的学びと対話的保育：ひとなる書房
- ・加藤繁美：(2007) 対話的保育上カリキュラム：ひとなる書房
- ・河邊貴子：(2005) 遊びを中心とした保育：萌文書林

Growing Awareness and Insight towards “Play” among Nursery Teachers **— A Case Study of Teachers Conferences in Nursery School —**

Hirano, Hitomi*
Kojima, Chieko**
Suzuki, Yuko*

保育の現状は厳しく、保育時間の延長、保育の効率化が望まれ、保育者が担当する乳幼児の数は定数いっぱい、保育現場は多忙を極めている。新保育所保育指針（2008年3月告示）においても保育現場の課題の一つに、保育者の資質向上のための各園の努力が求められている。

保育現場各所では、様々な方法で職員集団の質を高める工夫がされ、保育者は学びを深める工夫をしている。

本研究は、昨年の本学研究紀要掲載の園内研修の進展内容であり、一園期の場面取り研究からの保育者の育ちを土台としてさらに、二園期以降の研修の場で、遊び場面の実践記録を書き、記録からの保育の振り返りを通して、子どもも、保育者も遊びから学び、遊びに返す保育の実践の内容を記録から読み取り、考察することで、保育者たちが子どもの育ちへの気づきを見つめ、意見交換し学んだことを整理したものである。

キーワード：園内研修、実践記録、遊びからの学び、保育の振り返り、保育者の資質向上

*Nagoya Ryujo (St. Mary's) College

**Sugiyama Jogakuen University